まえがき

この本を手に取ってくださった一人ひとりの皆様へ。

初めましての方も、すでにご存じの方も、この度は誠にありがとうございます。

本書は私がこの世に生を受け、どのような生い立ちの中、何を感じ、数々の選択を経て今を生きているのか。また特殊な国際交流を通して切磋琢磨し、縁あった仲間たちとの喜怒哀楽の共有から培った進化と成長、そして自分の内面と向き合い切って得ることができた心の平安。日本と世界、および自他の関係性とは表裏一体の上に成り立つ、という私の実体験から辿り着いた世界観について赤裸々に綴りました。

改めてこの本を通して自分の人生を振り返るに、生まれたときから外国に縁があった私は、昨今騒がれている多様性がごく自然に身近に存在していたゆえに、日本に生まれながらにして価値観や感覚がどこか異質で日本人離れしていたことが現在の活動・生き方にすべてつながっていることを認めざるをえません。

ところが、日本人の歴史を辿ると、広い視野や謙遜の心で多様性を受け入れられる姿勢が元々備わっていた民族であったという発見もあり、私が異質なのではなく、古の日

本人の本質を現代の多くの日本人が忘れているだけなのではないかと考えるようにもなりました。

というのも近年の風潮として、なんでもカテゴライズすることで“多様性”という言葉がひとり歩きしているように感じることが多々あり、本来のそれとはわざわざ分別する必要性はなく、それこそ金子みすゞの『みんなちがってみんないい』という在り方が自然な考えであると思うのです。

また、私の特殊な経験を通して個人的に考える多様性を受け入れる定義とは、『互いの違いを認めたうえで、すべてを共有したり分かち合うことは不可能であることを理解すること』と結論づけました。

この結論に至るまで、それはそれは紆余曲折の葛藤と研究を重ね、自分自身が腑に落ちるまで向き合い続けました。

また何度も進路変更をした末に、誰に嫌われようが、たとえ大切な人を敵に回したとしても私は私のやりたいことをやると覚悟し、ごまかさない生き方へ変化したことで犠牲を生んだこともありました。

そんな私の覚悟の対極にある鋭利的な表現が、時に誰かを傷つけたり誤解を招いたりすることもあった一方、誰かの人生のどん底に光を照らしてきたこともまた事実。

といった経緯も含め、すべての人間に好かれることなど不可能であり、痛みを感じずして人は成長できないことを

悟り、最終的に自分と向き合うとは何か、を学べたことは人生の財産となりました。

激動の時代を生きる私たちは、今後いかにして自分の問題から逃げず、知性を身につけ、精神性やブレない軸を強く持つことがおのおのの幸福感につながるのでは……。と、私は感じています。

自分が決めた道を「これでよかったんだ」と思えるまでに行動し続けた結果こそが、自分の中の正解である。

そう感じられた『過程』をぜひ、あなたの人生に重ね合わせて違いを楽しんでいただけたら嬉しいです。

そしてあなたの心の中に、何かひとつでも魂の成長につながるきっかけになりましたら幸いです。